

◇太陽（日）神と牛頭天王の源流

①前四〇〇〇年代、日本語と似た言語を話すシュメル人がメソポタミア南部に移住してきて、自分たちの先祖は天地を創造したとする最古の神話を創り上げた。当初の神話は、口伝えだった。その後、楔形文字や青銅器文化を発達させ、ウルク、ウルなどに世界最古の都市国家文明を築く一方、天空の神で頭に角のある太陽神を最高神または都市の守護神として崇めてきた。

☆我が国における太陽（日）神や牛頭天王に対する信仰は、これに由来するようだ。

当時のメソポタミアでは、シュメル人の建てたウルク第一王朝（前三〇〇〇年代）、ウル第三王朝（前二二世紀）が続き、ウルなどの都市国家に巨大な神殿を建造して栄えたが、前二世紀に古バビロニアに征服された。その後、シュメル人はメソポタミアから突如姿を消した。

☆前二五〇〇〜前一五〇〇年頃、インダス川流域にシュメル系のインダス文明が栄えた。

ウル の遺跡から当時の王墓が発見され、出土した粘土板の解読から、第一王朝のギルガメシュ王を主人公とする英雄叙事詩やシュメル神話が広く知れ渡っていたと判明した。

第三王朝の滅亡後、シュメル神話はアツカド、バビロニア、アツシリアなどに引き継がれた。

バビロニア神話は、バビロニア王ハンムラビがアツシリアを制圧した前一七五〇年頃に成立したとされる。これらは総称して、メソポタミア神話または古代オリエント神話と呼ばれてきた。

☆古代オリエント神話には、カナン、ヒッタイト、エジプトの神話が含まれる場合もある。

〔シュメル の神話〕、原初の海の神ナンムは、天（アン）と地（キ）を創造した。天の神アンと大地の神キは、大気の神エンリルを産み、エンリルは大気の女神ニンリルを妻とした。ニンリルは月の神ナンナをもうけた。

ナンナは葦の女神ニンガルとの間に、戦争と豊饒の神イナンナ、太陽の神ウトウをもうけた。

エンリル、イナンナなどアンとキの子孫ら七柱は、天から地上に降り立ってアンナキと呼ばれ、

地上と冥界の審判者となつた。

〔メソポタミアの神話〕、天の神アンシャルと地の神キシタルは、雄牛の角をもつ王冠をかぶつた太陽神アヌ（天空の神、天の神、創造神）と大地の女神キを産んだ。アヌとキはエンリルを産んだ（アヌはキと交わり、英雄なる樹木と葦の種をその胎に注入した）。

エンリルは雄牛の角をもつ王冠をかぶり、長い髭を生やした姿で表現され、荒れ狂う嵐、野生の雄牛、洪水を引き起こす神の異名もある。妻で大氣の女神ニンリルは、月の神ナンナをもうけた。

ナンナはニンガルとの間に、戦争と豊饒の女神イナンナ、太陽（日）神で正義・道徳・真実の神ウトウの双子をもうけた。イナンナは冥界入りして冥界の女神エレシユキガルに出会つて殺されるが、彼女の助力により復活した。

太陽（日）神ウトウは、毎日、夜明けになると天の東門の扉を開いて戦車に乗り、天空を横切つて駆け抜けた。夕方になると天の西門より降り、夕食を食べてから眠りについた。エジプトの太陽神のごとく、冥界に通じる地下世界を西から東へ一晩中駆けまわることにはなかつたらしい。

彼は神聖な正義の執行者であり、苦しむ人々を助ける神として崇められてきた。アヌとキの子孫はアヌナキと呼ばれて、天上から地上に天降つたとされる。

☆「記紀」神話もこれと似ていないか。天皇の呼称、スメラミコトはシユメルに由来する。②メソポタミアやオリエントで崇められた太陽神アヌは救世主、契約を司る神としてヘブライ社会、ギリシャ・インド、キリスト教に姿や形を変えながら広まつた。

イラン高原に住むアーリア人が信仰した牛の角を生やした太陽神の女神ミトラも、太陽神アヌの流れを汲むらしい。ミトラ神は、カナン（ヨルダン川西方）人が高位の神として崇めた牛の頭を持つバール神（嵐の神・慈雨の神）として登場する。ギリシャ神話でも、四頭立て馬車に乗つて天空を駆ける太陽神ヘリオスに変貌して頭れ、雄鶏を象徴または聖鳥として大切に扱つてきた。

インド神話におけるミトラ神は、契約の守護神、契約で結ばれた盟友を意味した。毎年六月の一月月間、太陽の戦車に乗って天空を駆けながら契約を祝福する一方、ヴァルナ神（天空の神、司法神、水神）が契約履行を四六時中監視して、破った者に対しては罰を与えたという。

仏教の観音菩薩（救世菩薩）や弥勒菩薩の救世主的な性格は、ミトラ神から受け継いだとされる。祇園精舎守護神で、頭に牛の角を生やした牛頭天王の神格も、ミトラ神に由来する。

③イラン高原の古代アリア人は、神官・戦士・農民など階級制の下で、ミトラ教など様々な宗教を信仰してきた。このミトラ教は牛を生贄に供える一方、契約・救済を重んじてきた。信者は主に男性で、序列は父親、太陽の使者、ペルシヤ人、獅子、兵士など七位階から成っていた。

その教義は、バラモン教、ゾロアスター教、ギリシヤ教、仏教、中央アジアで救済を説いた弥勒信仰、キリスト教、イスラム教など世界的宗教に多大な影響を及ぼしてきた。

前二二〇〇年頃～前六〇〇年頃にかけて、ミトラ教などアリア人の多神教を礎にして、ゾロアスター（ザラスシュトラ）がアフラ・マズダーのみを信奉する新宗教を創設した。これがゾロアスター教またはマズダー教と呼ばれる世界最古の一神教で、教義として善悪の二元論に基づく善の優位と勝利を説き、善すなわち光の象徴としての聖火を尊んできた。一方で、自分の親、子、兄弟、姉妹と交わる近親婚を至上の善徳として称えた。

ゾロアスター教は、前六世紀に興るアケメネス朝ペルシヤ帝国の王家または王国を支える人々から熱烈に支持され、前三世紀に成立するパルティア国（アルケサス朝）に引き継がれた。

④前三三二年に、古代オリエント世界を統一したギリシヤ系アレキサンダー大王は、エジプトを併合したアケメネス朝ペルシヤ（前七世紀～前三三〇年）からエジプトを解放して、ファラオとしての地位を認められると、エジプトの太陽神で頭に羊の角を生やしたアメン神（ゼウスと同一視された神）の聖地に足を運び、そこで自身がアメン神の児であるとの神託を得た。このことか

ら、彼も羊の角を生やした兜をかぶっていたという。

アレキサンダー大王がアケメネス朝を滅ぼした百年後、ペルシャに興ったパルティア国（アルケサス朝、前三〜三世紀）では、宗教に寛容だったことで、ゾロアスター教（拝火教）、部派仏教上座部に属する説一切有部、それにミトラ教が入り混じって流行っていた。

⑤前一世紀、ミトラ教はヘレニズム文化と交流して地中海世界に伝播すると、ミトラス教として一〜四世紀のローマ帝国内で広がり、キリスト教をしのぐ勢力となった。

☆ミトラ神は、「洞窟内で手にナイフと松明を持ち、フリギア（トルコの中西部）帽を被った聖人の姿で生まれた」とも伝わる。一説では、「鍾乳洞で生まれた」とされる。

☆一九五四年、三世紀に建造されたロンドンのミトラ神殿が第二次世界大戦の爆撃地で発見された。神殿は見つかった場所（欧州本部新社屋の地下七^ミ）で復元され、公開されている。

キリスト教における救済的な神話、洗礼・聖餐などの儀礼も、ミトラ教に由来する。ローマ帝政下では、ミトラ教由来の男神ミトラスが守護神として崇拜され、後発のキリスト教を抑えて隆盛したが、双方は次第に反目して潰しあいに行った。結果的にキリスト教が勝利して、ミトラス教の救済的な神話、洗礼・聖餐の儀礼、十二月二五日の生誕祭を引き継いできた。

⑥パルティア国の滅亡後、ゾロアスター教はササン朝ペルシャの国教となり、帝国内はおろか中央アジアや中国まで広まった。ササン朝時代に整備されたマズダー教の経典「アベスター」の一節には、「ミトラ神は天の光の精霊である。日の出とともに、岩山の頂上に現れ、日が昇ると同時に白馬四頭が牽引する戦車に乗り、天空を駆け廻る」とあるそうなる。

⑦このようにミトラ神は、パール神、ゾロアスター教のミスラ神、ギリシャ神話の太陽神ヘリオス、インド神話のミトラ神、仏教の弥勒菩薩や牛頭天王、ローマ帝国のミトラス神に姿形を変えながら世界中に広まった。「宗教はミトラ教に始まる」と言っても、過言ではない。